

『平家物語』語り本の形成

—「一二之懸」を中心に—

原田 敦史

一

『平家物語』巻九の「一二之懸」は、一ノ谷の合戦において熊谷直実と平山季重が先陣を争った逸話だが、これを覚一本で読もうとすると、いくつかの不審な点があることに気づく。その検討を通じて、覚一本を含めた語り本系の諸本が作られるまでにどのような過程があったのかをうかがい知ることができるようになる。以下に考察してみたい。

先陣を志す熊谷直実・直家父子は、義経率いる一団を抜けて一ノ谷の西の木戸口に押し寄せる。敵の陣に向かって名乗りをかけるが、平家方では夜の間はそれに応じて木戸を開けようとはしなかった。一方の平山も、同様に単独行動をしていたが、後から来た成田五郎に途中でたばかれ、木戸口に着いたのは熊谷よりも遅かった。平山と合流した熊谷は、平家に対して再度名乗りをあげる。夜明けを迎え、平家方も城戸口を開いて応戦しようとした。本稿で対象とするのは、それに続く一連の記事である。まずは覚一本の構成を、大まかに表で示しておく。

覚一本	
a	平家方二十三騎の出陣
b	平山の進撃
c	平家方、城の内へ退く
d	熊谷、馬を射られ、息子も傷を負う。敵の射撃を受け、熊谷、息子に教訓。
e	熊谷、城内の平家を挑発。
f	越中次郎兵衛盛次、再度出陣するが、熊谷の気迫を見て引き返す。
g	熊谷、乗替に乗って戦う。

h	平山、馬の息を休めてから戦う。
i	源氏の馬は強く、平家の馬は弱し。敵に組もうとする平家勢なし。
j	平山、旗差の敵を討つ。熊谷も分捕あまた。
k	「熊谷・平山一二の駆け」評

およそ右のような展開を経て、

〈k〉熊谷さきによせたれど、木戸をひらかねばかけいらず、平山後によせたれど、木戸をあけたればかけ入ぬ。さてこそ熊谷・平山が一二のかけをばあらそひけれ。¹¹

との評に至るのだが、はじめに問題にしたいのは、この評がa以下の叙述と対応するものとなり得ているか否かということである。

〈a〉「いざや、夜もすがらなる熊谷おや子ひっさげてこん」とて、すゝむ平家の侍たれくぞ、越中次郎兵衛盛嗣・上総五郎兵衛忠光・悪七兵衛景清・後藤内定経、これをはじめてむねとの兵もの廿余騎、木戸をひらいてかけ出たり。

〈b〉こゝに平山、しげ目ゆひの直垂にひおどしの鎧きて、二びきりやうのほろをかけ、目糟毛といふきこゆる名馬にぞのったりける。旗さしは黒かは威の鎧に、甲るくびにきないて、さび月毛なる馬にぞのったりける。「保元・平治両度の合戦に先がけたりし武蔵国住人、平山武者所季重」となのって、旗さしと二騎馬のはなをならべておめいてかく。

〈c〉熊谷かくれば平山つゞき、平山かくれば熊谷つゞく。たがひにわれをとらじといれかへく、もみにもうで、火いづる程ぞ責た

りける。平家の侍共手いたうかけられて、かなはじとやおもひけん、城のうちへざつとひき、敵をとざまにないてぞふせぎける。

aからcの本文は、右のようになっていいる。ここに明らかなように、熊谷も平山も、一度も城戸口を抜けて城に駆け入ってなどいないのだ。城内から出てきた平家方が、熊谷・平山らに手を焼いて再び城内に退いたとある以上、彼らが戦っていたのは一貫して木戸の外だったはずなのである。²²

d以降においても、それは同じである。城内に戻った平家方を熊谷が挑発し、再び出てきた軍勢と戦闘になるのだが、平山もしくは熊谷が木戸より内に駆け入ったことは、最後まで記されないのである。前掲kの傍線部は、一体何を指すのか。熊谷と平山は何を争い、どの時点を以て平山が一番に駆け入ったと評しているのか、覚一本の文脈では不明確なままなのだ。

以下に引く八坂系第一類（中院本）と並べてみれば、その不自然さはさらに明瞭になる。

	中院本
a	平家方二十三騎の出陣
b'	平山、城内に駆け入る
c	平家方、城の内へ退く
d	熊谷、馬を射られ、息子も傷を負う。敵の射撃を受け、熊谷、息子に教訓。
e'	熊谷、城内の平家を挑発。二十三騎、再度出陣。
f	越中次郎兵衛盛次、熊谷の気迫を見て引き返す。【熊谷、息子を激励】
g	熊谷、乗替に乗って戦う。
i	源氏の馬は強く、平家の馬は弱し。敵に組もうとする平家勢なし。
j	平山、旗差の敵を討つ。熊谷も分捕あまた。
h'	熊谷、馬の息を休めてから戦う。
k	「熊谷・平山一二の駆け」評

を付した部分には若干の相違があり、覚一本には見られなかった【】の記事もあるものの、大まかな展開としては覚一本と類似しているといっている。そして、覚一本で問題のあったa/cの部分、中院本では次のようになっている。

〈a〉いさや夜もすから名のりつる、熊谷親子ひさけてこんとて、すゝむつはものたれくそ、ゑつちうの二郎ひやうゑのせう盛次、かつさの悪七ひやうゑのせうかけきよ、五郎ひやうゑのせう忠光、ことうないきたつな、まなへの四郎すけのふを、さきとして、むねとのつはもの廿三き、木戸をひらかせてくつはみをならへてかけいたり、²³

〈b〉ひら山かその日のしやうそくには、しけめゆひのひたゝたれに、あかかはをとしのよろひをき、しるきほるかけ、かつさのすけかもとよりえたりける、めかすけといふ馬にそのりたりける、はたさしは、二つひきりやうのひたゝれに、あらひかはのよろひをき、さひつきけなる馬にのりたり、かたきはくまかへにめをかけて、あひしらふ所に、ひら山あふみふみはりついたりあかり、大音しやうあけて名のりけるは、保元、平治、両度のかつせんに、かうみやうをしきはめて、一人当千の名をあげたりし、むさしの国のちう人、ひら山の武者所、すゑしけとはしらすやと、いひもはてす、しやうの中へ、おめきてかけいり、

〈c〉廿三きの者共、熊谷はかりとおもひたれば、又ひら山と名のる間、手こはくや思ひけん、しやうの中へはとひく、熊谷ふしもつゝきてかく、熊谷かくれば、平山はひかへ、ひら山かくれば、くまかへはひかへ、入かへくそたゝかひける、しやうの中のつはものとも、かけたてられて、はるかにひきしりそき、かれらをとさまになしてそふせきける、

中院本では、敵は熊谷だけだと誤認していた平家方の隙を突いて平山が城内に駆け入ったと、はっきり記しているのである。この記述があるた

めに、kの

熊谷はさきによせられたとも、きとをひらかねはかけいらす、平山は後によせられたとも、きとをひらけはかけ入ぬ、さてこそ熊谷、ひら山は、一ちん二ちんをあらそひけれ

も、全く不自然ではない。覚一本のbも、本来はこのような内容であつたであろうということ、そこからの改編を経た結果、kとの間に矛盾を生じてしまったのだろうという推測は、容易に得られるのである。

二

だが、一方の中院本にも問題点がないわけではない。前節で引用したように、cで平家方は、平山を追って城内へ戻っている。その後、「しやうの中のつはものとも、かけたてられて、はるかにひきしりそき、かれらをとさまになしてそふせきける」とあるのだから、戦闘はずっと城戸口より内側で行われていたことになるだろう。続くdで、平家方の射る矢によって熊谷は馬を失い、息子の直家も傷を負う。熊谷は、敵に対して大声で挑発して、再度乱戦になっていくのだが、本文には次のようにある。

〈f〉熊谷は、しやうの中をにらまへてこそたちたりけれ、去年の冬、さかみのかまくらをいてし時、命をはかまくらとのに奉り、かはねをは、せんちやうにさらさんと申きりたるなをさねなり…

〈g〉しやうの中の廿三き色もかはらす、又くつはみをならへてうちいてたり…

熊谷が城の中を睨んでいたという記述、その熊谷に対して城の中の平家勢が打ち出でたとする記述は、平家方が城内、熊谷が城外にいる状況にこそふさわしい。だが、cの段階で、彼らが戦闘を繰り広げていたのは城内のはずなのだ。熊谷はいつ城外に出たのか、先陣の平山はその間何をしていたのか。中院本の展開はちぐはぐであり、覚一本とは異なる問題を含んでいるといわざるを得ないのである。

これらのような本文は、いかにして形成されたのか。その問いについて考察しようとするならば、自ずと読み本系の諸本にも目を向ける必要があるだろう。あらかじめいってしまうならば、語り本系諸本は、読み本系的な本文からの再編によって成ったものであり、その過程において様々な問題を生じさせているのであろうというのが、本稿の基本的な見解である。そのことを検証するために、まずは、四部合戦状本の本文に着目したい。先程までと同様に、その構成を以下の表に示す。

四部合戦状本	
A	平家方二十三騎の出陣
F	越中次郎兵衛盛次が名乗りかけるが、熊谷の気迫を見て引き返す。
B	平山、城内に駆け入る
I	源氏方の馬は強く、平家の馬は弱し。敵に組もうとする平家勢なし
C	二十三騎、城の内へ退き、熊谷が追う。
D	熊谷、馬を射られ、息子も傷を負う。敵の射撃を受け、熊谷、息子に教訓。
H	平山、馬の息を休めてから戦う。
J	平山、敵の首を切る。
G	熊谷、乗替に乗って戦う。
K	「熊谷・平山、一陣二陣の争い」評

大文字のアルファベットは、覚一本・中院本の表における小文字と対応している。右の表から、語り本系とは種々の点で異なる構成であることが了解されようが、まず確認しておきたいのは、B以下の展開である。

平山をば其の時までは熊谷が家子かと思ひて、目も見懸げざる処に、平山、波打ち際の薄様たるより、喚きて懸けて通る。「武蔵国の住人平山武者所季重、是くこそ先を懸くれ」とて城内へ馳せ入る。城内の者共は、廿三騎が敵の三四騎を提げても来んずらんと思ふ程に、武者一騎懸け入りければ、或は甲を脱ぎたる者も有り。自ら甲

の緒をトめたる者も有り。唾て騒ぐ上、散々に懸けられて、蜘蛛の子を散らしたる様にぞ逃げにける。⁴⁴⁾

平家方が、敵は熊谷だけだと油断していた隙に平山が城内へ駆け入り、先陣を遂げたとする点で、中院本の内容に等しい。その平山を追って平家方二十三騎が城内に戻り、それに熊谷が続くことになっており(C)、語り本のように、以後の経過の中で、城内から出てきた越中次郎盛次と熊谷が対峙するという記事を挟むことはない⁴⁵⁾。そのため、中院本に見られたような展開の不自然さも感じさせない本文となっており、同時に、平山の城戸口突破を明記している点で、Kの

熊谷と平山の一陣二陣の諍ひとは是なりけり。熊谷は先に寄せたれども、木戸開かねば内へ入らず、平山は後に寄たれども、城の木戸口開きたれば先に内へぞ入る。介てこそ平山を先陣と定めけるに……との間にも齟齬はないことも、確認しておきたい。

四部本の本文は、中院本の不自然さを解消しうるとともに、覚一本のような矛盾も含んでいない。語り本系諸本の問題点を、一挙に説明しうるのである。ならば、ここまで指摘した語り本本文の不審点は、四部本のような本文が崩れた結果だと見ることが可能になるはずだ。語り本系諸本の淵源に、この四部本のような本文があったことを想定しうるのではないか。そのことをさらに確認するために、次節では、語り本系の中でも最も問題を抱えていると思われるfの記事に目を向ける。

三

覚一本fには、次のようにある。

是をきいて、越中次郎兵衛、このむ装束なれば、こむらごの直垂にあか皮おどしの鎧きて、白茸毛なる馬にのり、熊谷に目をかけてあゆませよる。熊谷おや子は、中をわられじと立ならんで、太刀をひたひにあて、うしろへはひとひきもひかず、いよくまへへぞすゝみける。越中次郎兵衛かなはじとやおもひけん、とってかへす。熊

谷是をみて、「いかに、あれは越中次郎兵衛とこそ見れ。敵にはどこをさらはふぞ。直実におしならべてくめやくめ」といひけれども、「さもさうず」とてひっかへす。悪七兵衛是をみて、「きたない殿原のふるまいやうかな」とて、すでにくまむとかけ出けるを、鎧の袖をひかへて「君の御大事これにかぎるまじ。あるべうもなし」とせいせられてくまざりけり。

①は、熊谷の挑発(e)を受けて進み出た越中次郎兵衛盛次に対して、熊谷父子が身構える場面である。だが、一騎の相手に対して「中をわられじ」というのは、いささか不可解である。自身は親子二人で相手は盛次一人、二対一の戦いなら、二人で一人を囲んだ方が有利ではないのだろうか。分断されることを警戒するのは、少数が多数を相手にするときのことではないのだろうか。この点に注意して四部本を参照すれば、四部本Fにも類似の表現があるものの、それは熊谷父子が盛次のみならず平家方二十三騎を相手にしようとする場面だということがわかるのである。その状況下であれば、「中をわられじ」という表現は全く不自然ではない。覚一本では、盛次一人が進み出たと描いているために、①の表現がうまく通じないものとなってしまっているのである。もっとも、中院本においても、eで熊谷の挑発に対して平家方二十三騎が出陣し、それに対する行動として「熊谷親子は、中をわられしと、あひもすかさず、たちならひ、たちをぬきひたいにあてゝそまかけたる」と記されるので、覚一本のような不審点はない。この点のみに限れば、覚一本の形は中院本に見るような本文が崩れたものだともいえるのだが、続く②については、四部本のような読み本系本文との関連にまで遡らなければ、覚一本の不審点を説明することはできない。

②でおかしいのは、「おしならべてくめ」という言葉そのものである。それは、明らかに騎馬状態を前提にした表現であるはずだ。だが、覚一本の熊谷は、すでにdにおいて敵の射撃によって馬を失っているのである。その熊谷が、乗替に乗るのはgである。馬を失ってから乗替に乗る

まで、彼は当然ながら徒歩状態であったにちがいないのだ。敵に対して「おしならべてくめ」などと呼びかけるはずがないのである。試みに、覚一本における「おしならぶ」の例を調査してみる。用例は全十九例、そのいずれもが戦闘の描写に用いられている。そして、海戦の場面を除けば、右の②のみを例外として、他の全ての場合において、騎馬武者同士の間で戦いであることが前後の文脈において明示されていたり、

おしならべてむずと組で、どうどおつ。(巻八「妹尾最期」)

などのように、「落つ」「落とす」の語によって、やはり騎馬状態での戦闘であることが読み取れる形となっているのである。それは、『平家物語辞典』が

(馬や舟に乗って、相手の馬や舟に)ぐいと並ぶ。

と説明している通りなのであって、徒歩状態で「おしならべてくめ」などと呼びかける②の例は、明らかに不自然なのだ。fの記事が、本来の位置から移動されたものではないかという推測は、容易に立てられるのである。

fの配列上の位置は、中院本も覚一本と同じである。従って、fが本来あったはずの位置から移動されたものであろうという推測を検証するためには、中院本を参照するだけでは十分ではないのだが、語り本のfが本来あったはずの位置から移動されたものであろうという見通しは、中院本の本文からも得ることができる。②に該当する表現を中院本fは持たないのだが、代わりに以下のような記述がある。盛次が熊谷と対戦せずに引き返してきたことに不満を抱いた悪七兵衛景清が、熊谷に挑もうとする場面に、

悪七ひやうゑかくまんとて出けるをも、あれ程のふてもものにあひてくんで、命をうしなひてなにのせんそ、君の御大事、これにかきるあしとせいせられて、これらもつるにくまさりけり

とあるのだが、この「組む」という戦闘行為そのものが、騎馬状態の平家方と徒歩の熊谷との間に行われるものとしては、想定しにくいという

ことである。まさか、わざわざ馬を下りてから組みつこうとしているわけではあるまい。実際、『平家物語』の中で、今日の戦では誰々に組もうとか、敵の集団に向かって自分に組めと挑発する言葉などを除き、具体的な戦闘局面において、騎馬武者と歩兵が組み討ちをした例は、管見の限り見当たらない。語り本系fの配列は、本来は熊谷が騎馬状態であったはずの位置から改編されたものではないかという推測は、覚一本・中院本の双方から得られるものである。

語り本におけるf改編の問題を考えようとするならば、現存の覚一本や中院本を遡った段階を想定しなければならぬ。そして、前掲の四部本記事表に照らせば、四部本のFが、語り本のような問題を発生させない位置に置かれていることは明らかである。四部本では、Fが熊谷がまだ馬を失う前に位置しており、

熊谷父子の中へ懸け入らんと欲るに、父子踏喰を並べ、太刀の柄に手を懸けて、少しも臆まず立ちければ、盛次左右無く中へも懸け入らず、一段計り引かへて、「和君に合ひて、命は捨つまじきぞ。大將軍に合ひて捨てん」と云ひければ、「汚しや、懸けよや、押し並べて組めや。越中次郎兵衛とこそ名乗りつれば、懸けよや」と云ひけれども、「用佐うぞ」と答へけり。熊谷父子も「中を破られじ」と押し並べて引かへけり。熊谷父子も「中を破られじ」と押し並べて引かへけり。盛次も廿三騎にて、馬の鼻を立て並べ、矧矢形に引かへ、間一段を隔て、詞諍ひ為れども、互ひに矢一つも射ざりけり。越中次郎兵衛が引けへたるを、「悪し」とや思ひけん、悪七兵衛景清、越中次郎兵衛尉を妻手に成して、渚の方より熊谷に組まんとて、喚きて懸ければ、次郎兵衛尉之を見て、「呼殿、君の御大事、是に限るまじ。あれ程の猛き乞頼の様なる者に合ひて死にては詮無し。呼殿、く」と云ひければ、其れに寄るべからねば、悪七兵衛も組まざりけり。

これら傍線部の表現が、違和感なく理解できるようになっているのであ

る。換言すれば、熊谷が単独で平家方と対峙しようとする、fの記事の配置が、語り本系諸本では読み本系に比して決定的におかしいということなのだ。それは、明らかに改編を経た結果として生じた矛盾点であり、語り本の淵源に、右に見るような四部本的な形態があったと考えることは、無理のない想定であると思われる。無論、現存の四部本そのものが見るわけにはいかないもので、あくまでも「四部本の本文」と呼んでおくのが妥当だろうが、語り本の形成を検討する上で、そのような本文との関わりを考えなければならぬことは確かであろう。

語り本系の基底にあったのは、熊谷と平家勢の対峙という場面を移動することで、新たな展開を創出しようという構想だったのだろう。その結果として、城に駆け入ったはずの熊谷がいつの間にか城外に出ていたり、馬を失ったはずなのにあなたも騎馬状態であるかのような言動を繰り返すという矛盾を生じさせてしまったのであり、それらの不手際の痕跡をよく残しているのが、中院本の本文なのである。一方の覚一本は、戦闘の場所を一貫して城外とすることで前者の問題を回避しようとしたが、逆に末尾の評と齟齬を生じさせることになったのであり、後者については「おしならべてくめ」などの表現までも残存させた、不自然なままの本文となっているということであろう。これらのことを踏まえて、共通の淵源の位置に四部本の本文を置いてみれば、覚一本・中院本の関係は整理しやすい。bの内容やfのはじめに熊谷父子が二十三騎の平家勢を相手に身構えていたとする点など、中院本がのほろが古態を残している箇所がある反面、fの傍線部②やhの叙述など、覚一本のほうに四部本との近さが認められる例もある。共通の源からそれぞれに派生してきたのが、現存の語り本系なのだと考えられる。

おそらくは、熊谷の活躍の場面をd以下に集約しようとしたのが、語り本なのである。如上の展開において不要とも思える平家方二十三騎の存在を、覚一本が切り捨てているところからも、それは窺い知ることができる。そのような構想に基づいて構成を組み替えた痕跡が、現存の覚

一本や中院本の中に複数見られるということなのである。

四

ここまで、語り本の形成過程について、特に四部本との関わりを重視しながら考えてきた。些細な問題にまでこだわってきたのは、如上の考察における延慶本の位置づけに関する問題を提起したためである。現存の語り本の多くの部分に、読み本系からの影響が見られるということについては、おおよその共通理解が得られているといえるだろう。そして、そのような検討の際に第一に注目される読み本系の本文は、延慶本であることが常である。だが、前節までに指摘した事柄に関しては、延慶本を通して、語り本の母体となった本文の面影を探ることは、できそうにないのだ。少なくとも、四部本以上に延慶本を重視することは、本稿が扱った問題の範囲では難しいのである。延慶本（長門本も類同）の記事表を以下に掲げる。

延慶本
《熊谷の名乗り》
D' ① 熊谷、馬を射られる。
E' 熊谷、平家を挑発
D' ② 敵の射撃を受け、熊谷、息子に教訓。
《平山到着》
A 平家方二十三騎の出陣
F' 越中次郎兵衛盛次が進み出るが、熊谷の気迫を見て引き返す。
B 平山、城内に駆け入る
I 源氏方の馬は強く、平家の馬は弱し。敵に組もうとする平家勢なし
C' 二十三騎、平山に攻めかかり、熊谷がそれを追う。
D' ③ 熊谷の息子、負傷。
K 「熊谷・平山、一陣二陣の争い」評

他本とは大きく異なる構成となっているのだが、語り本において最も問題となっていたfに該当する記事は、次のようにある。

〔F〕越中二郎兵衛盛次、真先係テ出キタリ。好ム装束ナレバ、紺村濃ノ直垂ニ、黒糸威ノ鎧ニ、白星ノ甲ニ、白葦毛ノ馬ニゾ乗タリケル。熊谷ニ押並テ組ムズルヤウニハシケレドモ、熊谷スコシモ退ズ、父子アヒモスカサズ立タリケリ。越中次郎兵衛一段計ヘダテ、〔ワ君ニ相テ命ヲバ捨マジキゾ。大將軍ニコソ組ムズレ〕ト云ケレバ、〔キタナシヤク、組ヤク〕トゾ申ケル。越中次郎兵衛ガ引ヘタル、ヲソシトヤ思ケム、悪七兵衛景清、二郎兵衛ヲメテニナシテ係ケルヲ、「ヤ殿、七郎兵衛殿。君ノ御大事、是ニ限ルマジ。アレホドノ不敵ガタイニアウテ、命失テ詮ナシ。ヤ殿」ト云ケレバ、制セラレテ悪七兵衛モ係ザリケリ。廿三騎ノ者共モ熊谷父子モ係ザリケリ。互ニ詞戦計也。⁷⁾

語り本、特に覚一本において指摘した不審点①②に対応する記述が、延慶本には見られない。すなわち、覚一本①②が生じさせている問題は、四部本の本文からの崩れとして説明することはできても、延慶本の本文との関わりで説明することは困難なのである。

さらに重要なのがgである。語り本において、fの熊谷が、徒歩のはずなのに騎馬状態であるかのような言動をしているという矛盾を決定的にしているのは、直前のdで馬を失っていることに加え、直後のgで乗替に乗ったと明記されていることなのである。D'①で熊谷が馬を射られた後で、Fの局面を迎えている点では、延慶本も語り本に近しい。だがその延慶本には、gに該当する記述がないのだ。語り本が延慶本のような本文を基としているならば、熊谷が乗替に乗ったという記事を、fの後という矛盾を決定的にする位置に、わざわざ付け加えたことになるが、そうした経緯は考えにくいのではないだろうか。一方の四部本には、Gの記事が存している。これらのことを踏まえれば、四部本以上に延慶本と語り本の近さを考えるべき要素はないと判断するのが妥当だろう。

そのほかにも、語り本と四部本の本文の近さを証する例はある。例えば、D (d) において熊谷の息子直家が傷を負う場面、語り本と四部本はともに、傷を受けたのが左の腕であったことを明記する。だが延慶本には、

〔D③〕「熊谷息子小次郎直家、生年十六歳、軍ハ今日ゾ始ナル」トテ楯ノ際ニ攻寄テ戦ケルガ、小ヒヂヲイサセテ引退ク。とあるにすぎない。

また、四部本と類似した構成・本文を持つ南都本や『源平闘諍録』を視野に入れることによって見えてくる問題もある。両本の構成を、四部本との主な相違を注記する形でまとめれば、次のようになる。

闘諍録		南都本	
K' J' H	G	K	J' H
平山、旗差の敵を討つ。 「平山の二度の駆け」評	敵に組もうとする平家勢なし 熊谷、馬を射られ、息子も傷を負う。敵の射撃を受け、熊谷、息子に教訓。 〔熊谷、息子を激励〕を含む)	平山、旗差の敵を討つ。	平山、旗差の敵を討つ。
F' A	D' I' B	F' A	D' E
盛次の名乗りなし	敵に組もうとする平家勢なし 熊谷、馬を射られ、息子も傷を負う。敵の射撃を受け、熊谷、息子に教訓。	〔盛次の名乗りなし。「中を割られじ」の言葉、なし〕	熊谷、敵の射撃を受け、息子に教訓。(熊谷、息子を激励)を含む)
	D' I' C B		D' (2)
	(本文やや異なる)		熊谷、馬を射られ、息子も傷を負う。

注目したいのは、D'に含まれる【熊谷、息子を激励】の記事である。弓矢トル習ヒ、心ハ家ニ生レ付物ソ。敵ハ千騎モアレ万騎モアレ、人ニハウタセシ、我一人シテ皆討ント大ケナク心ヲ懸ヨ(中略、戦い方を教訓) 幼少竹馬ノ昔ハ、荒キ風ニタニモアテシトコソハ育シ

ニ、成人長大ノ今ハ、弓矢トル習ヒ、家重代ヲ思ヘハニヤ、只死トノミコソイサメケレ。地体ヨカリケル子ヲ父カ目ノ前ニテカウ下知スル間、ナシカハワロカルヘキ、何度モ父ヨリ面ニハス、メ共、一度モウシロニハ立サリケリ
(南都本)¹¹

となつてゐるのだが、これは中院本ではfの中に含まれる

熊谷小二郎に申けるは、しすともかたきによはけみすな、しやうのかたをまくらにしてふせとて、日比はあらし風にもあてしとこそはせしに、弓矢とる身のならひとて、今はひとへにしねとそをしへける、もとよりかうなる小二郎か、親にかくはいはれたり、いよくさきへはすゝめ共、うしろへは一あしもしりそかす

という記事と対応しているのである。中院本のこの記述は、鬪諍録・南都本に見られる記事が語り本の中に残存している例と考えることができるだろう。語り本jで平山が倒した相手が旗差の敵という点で、これら二本と共通していることも、同様の例の一つである。その意味では、本稿で「四部本的本文」といういい方で想定してきた語り本系の母体たる本文は、四部本・鬪諍録・南都本を遡った祖本の位置に想定しておくのが穏当だということにもなるが、その姿を透かし見ようとする上で、現存の延慶本(長門本)はあまり助けにはならないようだとの見通しは動かない。

以上のように考えるのであれば、その「四部本的本文」と現存の延慶本との関係がどのようなものかということについても、付言しておかなければならないだろう。そのために、延慶本に見られるいくつかの問題点を指摘しておきたい。例えばD²である。熊谷が、敵方の射撃に耐えながら息子に矢に対する防禦のしかたを教える場面、他本と異なり、平家方が城戸口を開く前に位置している点で特異だが、本文には

熊谷、子息直家ニ云ケルハ、「敵寄レバトテサワグナ。鎧ノ射向ノ袖ヲ甲ノマカウニアテヨ。アキマヲ、シメ。ユリ合クシテ、常ニ鎧ヅキセヨ。ハタラカデ立テ、鎧ニ裏カ、スナ」トゾ云ケル。

とある。問題は傍線部で、南都本に類句があるが、延慶本の文脈では、まだ平家方が木戸を開かずに城内に引きこもっている段階なのだから、敵など寄せるわけがない。不審な表現であるといえよう。あるいは、同じく他本とは大きく異なる位置に置かれている《平山到着》の記事、本文に次のような箇所がある。城戸口まで来る道中、一度は成田にたばかられて後れを取ったものの、抜き返して結局は成田よりはるかに先に到着したことを自讃する言葉に、

「(成田は)心ハタケク思トモ、馬弱テサキヲ係事ハ叶マジキ物ヲ。熊谷殿馬ト季重ガ馬トハ、アワレ逸物ヤ」トゾ褒タリケル。

とある。これが、D¹ですでに馬を失っている熊谷に対して言うことだろうか。熊谷の馬がすでに射殺されていることはすぐにわかったはずであり、やはり不審な表現だといわざるを得ないのである。また、最後のKには

平山ハ旗指射殺レタリケレドモ、木戸口ヲ開タレバ、平山ハ先ニ係入ヌ。サテコソ平山一陣、熊谷二陣ニ被成ニケレ。熊谷平山一陣ニ陣ノ諍トハコ、ナリケリ。

とあるのだが、時系列としては旗差云々は木戸が開いた後のことであり、傍線部の表現はやや据わりが悪い。これらの問題点は、四部本などの他の読み本系諸本では生じていないものである。だから延慶本のほうが改編された後の姿なのだと、その逆なのだともいえるだろうが、これらの例を見る限りでは、前者の可能性の方が高いのではないかと考える。

五

前述のように、語り本系の成立を考える上で、「延慶本的本文」が重視されてきた。千明守氏は、屋代本・覚一本の源に「延慶本に近い形態をもった本文」があったことを想定する。櫻井陽子氏は、延慶本・長門本・『源平盛衰記』の読み本系三本を遡ったところに「読み本系祖本」を仮想し、その姿を知ろうとする上で、時には語り本系の覚一本の本文も、「補

助線」たりうることを論じている。⁹³ そのような方法が有効な場合が多いことは、確かであろう。だが、そうした図式にあてはまらない場合もあるということ、ここでは強調しておきたいのである。「延慶本の本文から語り本へ」という線が図式化されすぎるあまり、見えなくなるものがあるようではならない。本稿では最後に、やはり語り本と四部本の本文との間に親近性を認めるべき例を、一ノ谷合戦譚の中から一つ挙げておく。平家公達である師盛の最期を語る記事である。四部本には、次のようにある。

小松殿の五男、備中守師盛は、侍五人・御身共に六人にて小船に乗りて、渚より二段計り洋へ押し出だし、軍見物して御しけるに、先祖の侍に清四郎馬允と云ふもの、敵に追ひ立てられて、船も無き渚へ向けて逃げゝるが、備中守殿の御船を見付け奉り、「然るべし。助けさせたまへ」と申しければ、「嗚那無慙や、去来や、助けん」とて、船を渚へ寄せられけり。(中略)馬の太腹まで打入れつゝ、大の男の物の具し乍ら小船に飛び乗りたれば、何じかは吉かるべき。践み返して、主も我が身も一つ所にぞ沈みける。源氏の郎等共、之を見て、引き上げく、昇きけり。(四部本)

すでに指摘があるように、⁹⁴ 南都本とも重なる二重傍線部は、敗戦が決定的になり、緊迫した状況の中にあつては、いまひとつ意味が取りにくい表現である。これが、中院本では、

小松殿のすゑの子に、ひちうのかみもろもりは、しうしう八人小舟にとりのりて、をきにうかひて、いくさのなりゆくやうを、見給ける所に、新中納言のさふらひに、清右衛門のせう重定、かたきにおつかけられ、みきはへむけてはせくたり、あれは、ひちうのかみ殿の御舟とこそ見まいらせ候へ、その御舟へまいり候はんと申ければ、しけきたうたすなのせよとて、舟を渚へよせられけり、そこしもとをあさなりければ、馬のふとはらひたる程に、うち入て見れば、そのあい、弓たけはかりは、あるらんとそ見えし、今はとくのれかし

との給へは、すこしうちよせて、大の男の、をもよろひきたるか、さしもちいさき舟へ、かはととひのらんに、なしかはよかるべき、舟をし返して、一人もたすからず、はたけ山からうとう、ほんたの二郎親経、はせきたりて、くまてををろして、ひ中のかみをとりあげ奉りてくひをとる、今年十四さいにそなられる(中院本)

とある。二重傍線部は、四部本的な表現が残ったものと見て間違いあるまい。後者の傍線部と併せて、延慶本には見られない表現を四部本と中院本は共有しているのであり、両者の親近性は明らかである。覚一本にはこれらの傍線部は見られないが、前節までの考察と同じく、四部本的本文を源として、語り本がそれぞれ派生していったものと見ることは許されるだろう。一方の延慶本には、

小松殿ノ末御子、備中守師盛ハ小船ニ乗テナギサニソイテ、助船ト志テ落給ケルニ、薩摩守ノ郎等ニ豊島九郎真治トテ究竟ノ甲者、大カニテ有ケルガ、岸ノ上ニ立テ、「アレハ備中守殿ノ渡セ給候ト見進候ハ、僻事ニテ候カ。是ハ薩摩守殿ノ御内ニ、豊島九郎ト申者ニテ候。守殿ニハ後レ進セ候ヌ、助サセ給候ヘ」ト申タリケレバ、年来ホシト思ワレケル真治也、「此船ヨセテアレ乗ヨ」ト宣ヘバ、「御舟ハ少候。イカニシテカ乗セ候ベキ」ト侍共申ケルヲ、「只乗セヨヤく」ト宣ケレバ、力及バデヨセテケリ。真治大ノ男ノ鎧キテ、高岸ヨリ急ギ飛乗リケレバ、舟バタニ飛カ、リテ、踏傾ケテ、乗直サムくトシケルホドニ、踏返シテ一人モ残ラズ皆海ヘ入ニケリ。是ヲ見テ川越小太郎重頼ガ郎等、十郎大夫八騎馳来テ、熊手ニ係テ是等ヲ取上テ頸ヲ切ル。

とある。二カ所の波線部、師盛は小船に乗りながらさらに助け船を求めていたという点、あとから乗ろうとした武士が、年来自分の許に欲しいと思っていた者であったことなど、⁹⁵ 長門本以外の諸本には全く共有されていない。ここでも延慶本(長門本)は、語り本の祖型としての位置を主張できるものではないと思われる。

数は少なくとも、このような例も存するのだということは、語り本の成立過程を考へること、その淵源にいかなる『平家物語』があったのかを知ろうとすることのために、不可欠の視点である。本稿は、そのための小さな試みの一つである。

*1引用は、日本古典文学大系本による。

*2早川厚一・佐伯真一・生形貴重氏『四部合戦状本平家物語全釈 卷九』（二〇〇六年、和泉書院）に指摘がある。

*3引用は、『校訂中院本平家物語 下』（二〇一一年、三弥井書店）による。なお、同書の校異欄による限り、同じ八坂系第一類の三条西家本との間に、問題とすべき異同はない。また、本稿では煩瑣を避けて語り本系の本文としては二種だけを取り上げるが、比較対象として百二十句本などを加えても、論旨に影響はない。

*4引用は『訓読四部合戦状本平家物語』（一九九五年、有精堂）による。

*5四部本では、語り本のeに該当する熊谷の挑発は、表の範囲より前、夜の間にも木戸の外で熊谷が喚いていた言葉となっている。『源平闘諍録』も同様。

*6一九七三年、明治書院。「おしならぶ」の項は、池上洵一氏執筆。

*7四部本Dに、「熊谷次郎直実は馬の太腹を射させて下り立ち、子息小次郎と押し並べて」という箇所があるが、不審。送り仮名に問題あるか。

*8延慶本に一例のみ、判断に迷う例がある。卷十の藤戸合戦において、源氏方の佐々木三郎らが馬で渡海して敵陣に攻め込む場面に、

佐々木三郎以下、敵ノ前ニ渡付テ、上野国住人^{和見八郎ト}、平家郎等讃岐国住人^{加江ノ源次ト組タリケルニ}、和見八郎マロビニケリ。

とある箇所、両者が騎馬状態だったのか否か、前後の状況がいまひとつ判然としない。長門本は延慶本と同様だが、南都異本には押し並べて組んだとあり、四部本では和見が馬を離れて敵の舟に乗り移って組んだことになっている。

*9逆に、これらの要素を拾い集めて構成し直したのが四部本の本文であるという蓋然性は、極めて低いと考へる。

*10引用は『校訂延慶本平家物語 卷九』（二〇〇五年、汲古書院）による。

*11引用は『南都本南都異本平家物語 下』（一九七二年、汲古書院）により、私に句読点を付した。

*12『平家物語 屋代本とその周辺』第二編第二章（二〇一三年、おうふう。初出一九九三年）。

*13『平家物語本文考』第二部第一章（二〇一三年、汲古書院。初出二〇〇六年）など。

*14注2前掲書。

*15すぐれた武者を求める心情としては、卷四における競に対する宗盛の例がある。